



豊ヶ丘小 パクパク通信

平成23年11月28日
多摩市立豊ヶ丘小学校
学校長 小林 佳世
栄養教諭 早乙女 理恵
No.19

今週末からいよいよ12月！カレンダーも最後の1枚となりました。充実した1カ月になるといいですね。

11月の豊ヶ丘小の食育②

4年生 総合的な学習の時間

「おやつを食べたい！どんなおやつ？」

前号に続き、4年生の総合の学習のレポートです。青年海外協力隊にいらっしゃった近藤先生から、2日の5校時に海外の食糧事情についてお話をいただきました。色々な国にいらっしゃったのですが、今回は2年間滞在したドミニカ共和国のお話でした。ドミニカ共和国で栽培されているサトウキビやバナナ、カシューナッツ、コーヒーなど花を見て当てるクイズ形式で授業は始まりました。そして学校の給食はパンと牛乳だけ。牛乳だけの日や、でない日もあることを聞くと

「これだけ？」「え～！かわいそう」などの声が上がりました。

そして今回のメイン、児童労働の話に入ります。みんなが大好きな、チョコレートの主原料であるカカオの実は、一体だれがどのように栽培し収穫しているのかを動画で見ました。ガーナの6歳と11歳の兄弟が、2年前から知り合いのカカオの農園主に雇われていること。兄弟の母親は体を壊し、故郷へ帰されてしまったこと。二人の働いた収入は母親への仕送りと、農園での食費でなくなってしまうこと。学校に行きたくても、働かなければいけないことなど。画面を釘づけになって見入る子どもたちで、教室はいっぺんにシーンと静まり返りました。



みんなが毎日食べているおやつの主原料の多くは、外国からの輸入品であり、それを栽培し収穫しているのは、学校にも行けず生きるために働かなければいけない子供たちであること。そのことを知り、少しでも食糧を大切にしたい。そして日本のものや多摩のものを選ぶ意識をもち、自分たちで出来ることはないかを考えてほしいと、近藤先生は話を結びました。



子どもが働くなんで、日本では考えられないことを知って、衝撃を受けた。私は学校に通えてとても幸せだと思った。給食がパン1個と牛乳だけとか、ひどい時には何も出ないと聞いて驚いた。

学校に行きたくても行けない人たちがこの世にはたくさんいるんだなと思った。頑張っている子どもたちに、今すぐ感謝の気持ちを伝えたい。

ぼくが食べているチョコレートは、僕ぐらいの子どもが、何になるか知らずにカカオ豆を採っていることを知った。ドミニカ共和国の給食はパンと牛乳だけで、ひどい時は何も出なくて、日本では考えられないと思った。

自分たちがふつうに食べている物やお菓子の材料はほぼ外国から来ているのが分かった。チョコレートの原料であるカカオは、子どもが何になるかも知らずに苦労して採っていたのが分かった。しかも、その子たちが働いた分のお金は、生きていくために使うので精一杯というのがかわいそうだった。日本の子どもはとても幸せだなと思った。

お菓子の原材料はほとんどが外国から輸入されているのはびっくりした。農園主が「子どもがけがをしても俺のせいではない」と言っていたけど、それはひどいと思った。ドミニカ共和国では学校にお金を持って行ってカフェテリアでお菓子を買っていたけど、ぼくもやってみよう。